

評価についての考え方

1. 評価についてどのように考えているか

【97.0%の教師が評価は児童への励ましや動機づけになると答えており、評価は積極的に意義づけられている。また8割の教師が、否定的評価は児童の自信を失わせるだけだと考えている。テストに関しては、努力の反映とみる教師は64.3%、手作りのテストを使うべ

きと考えている教師は33.3%である。観点別評価については、基礎学力の向上につながると考えている教師は6割、児童を観点別にみることに無理があると考えている教師は約半数である。】

Q7. 評価についていかがいます。

D. 評価についてどのように考えていますか。1)～7)のそれぞれについて当てはまる番号に○をつけてください。

(1) 全体的傾向

以上では、通知票を記入する際の手順や方針について焦点をあてたが、本節では、より一般的な評価に対する考え方について取り上げる。図4-10は、評価についての考えをたずねたQ7Dへの回答結果を示している。はじめに、「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計値に着目して、全体的にみてみよう。

まず、97.0%の教師が評価は児童への励ましや動機づけになると答えていることから、評価は積極的に意義づけられていることがわかる。また8割の教師が、否定的評価は児童の自信を失わせるだけだと答えている。評価は、児童に対してポジティブな効果とネガティブな効果をもたらさうる両刃の剣として捉えられているようだ。そして、児童への励ましや動機づけになるのは、「ここがだめだ」というような否定的評価ではなく、誉めたり認めたりするという意味での肯定的評価だけであるという認識がうかがえる。これは、近年の児童観の変化とも関係していると考えられる。いずれにせよ、このような認識が教師

の評価行為を支配していると考え、近年では、だめなところや問題点を指摘することによって、児童に反省を促しつつ奮起させるというような指導・評価は、もはやみられなくなっている可能性がある。実際、通知票を記入する際においても、児童の長所を伝える意識を持っている教師は100%近いのに対し、問題点や課題を伝えることを意識している教師は半数程度にとどまっていた(前節参照)。

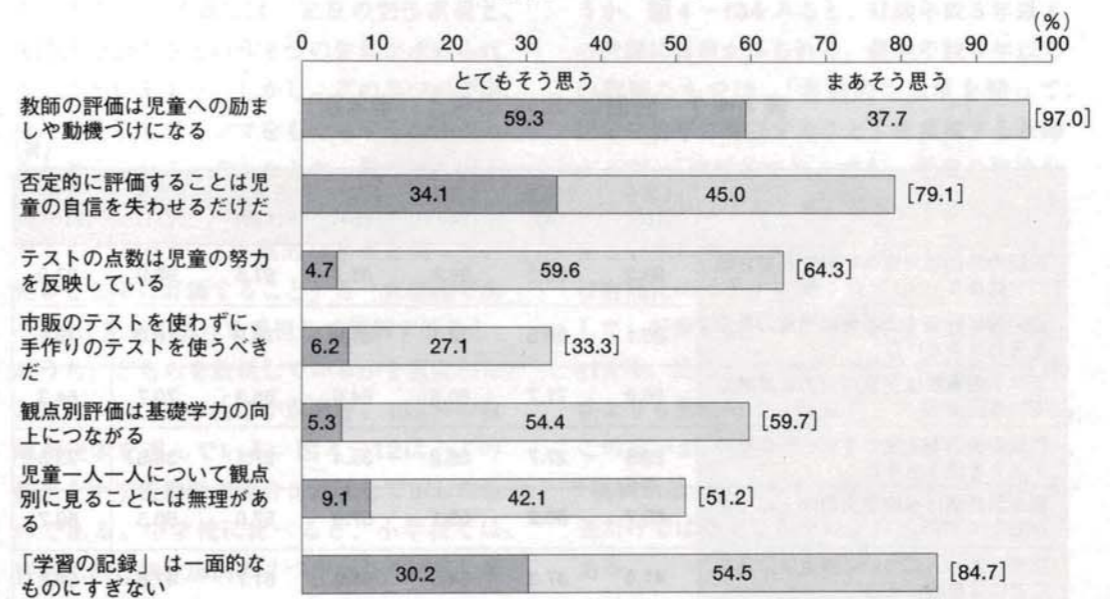
さて、教師は、テストについてはどのように考えているのだろうか。テストの点数は児童の努力を反映していると思える見方は64.3%（「とてもそう思う」は4.7%足らず）であるが、そう考えている人のほうが、テストの結果を中心にした評価を行う傾向があった(図4-11)。一方、手作りのテストを使うべきと答える教師は、33.3%と少ない。観点別学習状況の導入によって、一人一人の個性を重視した評価が掲げられる現在においても、全国的に標準化され、フォーマット化された市販のテストが使われ続けているのは、一見不自然な気もする。しかし、前節にみたように、テストの結果を中心にして評価を行っている

教師は55.5%と、今やテスト自体の重要性が低下しているため、テストの形式や内容を工夫するといった労力の払われ方は考えられなくなっているのだろう。また、市販のテストを作成している業者は、指導要録の形式に対応するのが速く、一枚のテストに観点別学習状況の各項目ごとの問題を名目上配分し、それぞれの項目を点数化できるようにしている。実際、7割強の教師がこれを観点別に集計し

ていた。

次に、観点別学習状況について、教師はどう考えているのだろうか。観点別評価は基礎学力の向上につながると考えている教師は6割、児童を観点別にみることに無理があると考えている教師は約半数である。このような点からの観点別学習状況に対する評価は、教師の間でも意見が分かれている状態といえる。

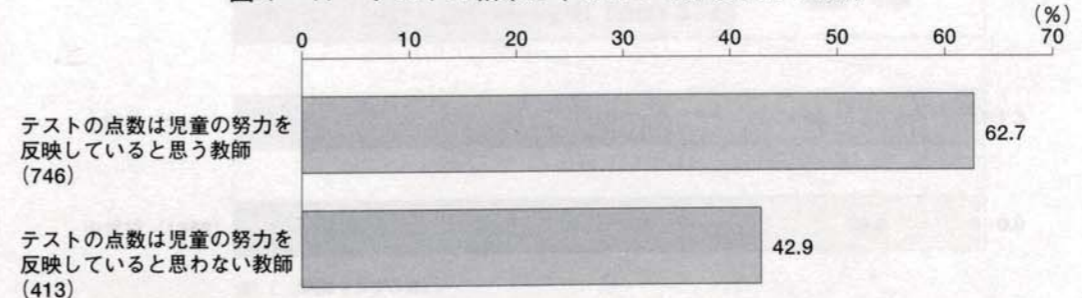
図4-10 評価についての考え



注1) サンプル数は1161人。

注2) []内の数値は、「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計。

図4-11 テストの結果を中心にして評価を行う割合



注1) ()内はサンプル数。

注2) 数値は、「とても当てはまる」と「まあ当てはまる」の合計。

(2) 学年による差

以上のような評価についての考え方は、教師が教えている学年によって異なるのだろうか。Q7Dの各項目を、授業最多学年ごとに比べてのが表4-7である。特徴的な点だけ述べておこう。

否定的評価は児童の自信を失わせるだけだという意見は、低学年の1・2年生で特に多い。低学年では、だめなところや問題点を指摘するという評価のあり方は、いっそう敬遠されている可能性がある。テストの点数は児童の努力を反映しているという考えは、1年

生でもっとも低い(56.0%)、2年生でもっとも高くなり(71.7%)、3年生で60.5%に落ちる。その後少しずつ上がっていき、6年生では70.7%に戻る。テストにおいて、1年生は家庭的背景による差が顕著にみえやすいが、2年生では比較的その遅れがカバーできやすいと考えられる。3年生では、再び遅れが目立つようになるが、その後次第に、その遅れは、家庭的背景などの差としてではなく、努力の差としてみられるようになるのではないだろうか。

表4-7 評価についての考え(学年別)

	1年生 (168)	2年生 (148)	3年生 (142)	4年生 (164)	5年生 (170)	6年生 (171)	全体 (1161)
教師の評価は児童への励ましや動機づけになる	98.2	95.3	95.8	95.7	97.6	98.9	97.0
否定的に評価することは児童の自信を失わせるだけだ	85.1	86.5	76.7	81.8	75.9	76.0	79.1
テストの点数は児童の努力を反映している	56.0	71.7	60.5	64.0	65.3	70.7	64.3
市販のテストを使わずに、手作りのテストを使うべきだ	29.8	27.7	35.2	35.4	27.1	38.6	33.3
観点別評価は基礎学力の向上につながる	60.7	60.2	59.1	57.9	57.0	60.3	59.7
児童一人一人について観点別に見ることには無理がある	47.0	47.3	54.3	58.0	51.7	47.9	51.2
「学習の記録」は一面的なものにすぎない	87.5	81.0	90.8	84.1	84.7	82.4	84.7

注1) ()内はサンプル数。
注2) 数値は「とてもそう思う」と「まあそう思う」の合計。

2. 教師の評価観—客観志向と個性志向

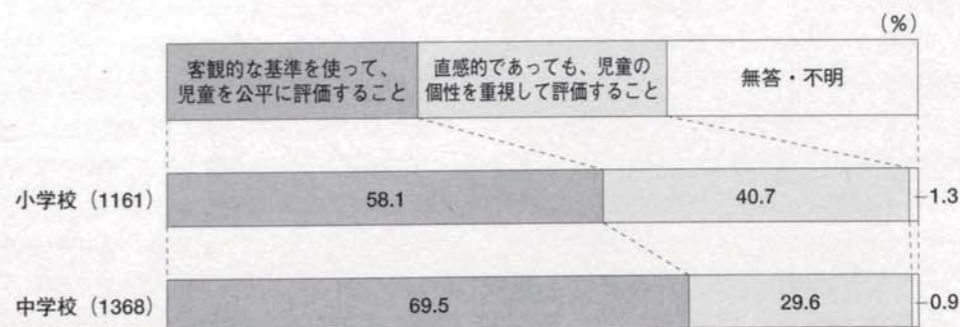
【「客観的な基準を使って、児童を公平に評価すること」と「直感的であっても、児童の個性を重視して評価すること」のうち、あえていえばどちらを重視しているかをたずねたところ、58.1%の教師が前者を、40.7%の教師が後者を選んだ。小学校では、客観志向と個性志向の2つが拮抗している。】

Q9. あなたは、授業や生徒指導の場面で、どんなことを大切にしていますか。各ペアの中で、あなたがあえていえば重視していると思うほうの番号に○をつけてください。

現在、小学校では、テストだけを指標とせず、多様な基準によって、評価が行われている。そして、評価には、児童の個性重視と、客観性や公平さという2つの要素が求められているといえよう。しかし、この2つの要素は、時としてジレンマをもたらす可能性があると考えられる。そんなとき、教師はこの2つの要素のうち、あえていえばどちらを重視するのだろうか。「客観的な基準を使って、児童を公平に評価すること」と「直感的であっても、児童の個性を重視して評価すること」のうち、どちらを重視しているかを質問したところ、58.1%の教師が前者を、40.7%の教師が後者を選んでいる。図4-12は、この結果を中学校教師の場合と比較して示したものである。中学校に比べると、小学校では、客観志向と個性志向の2つがかなり拮抗して

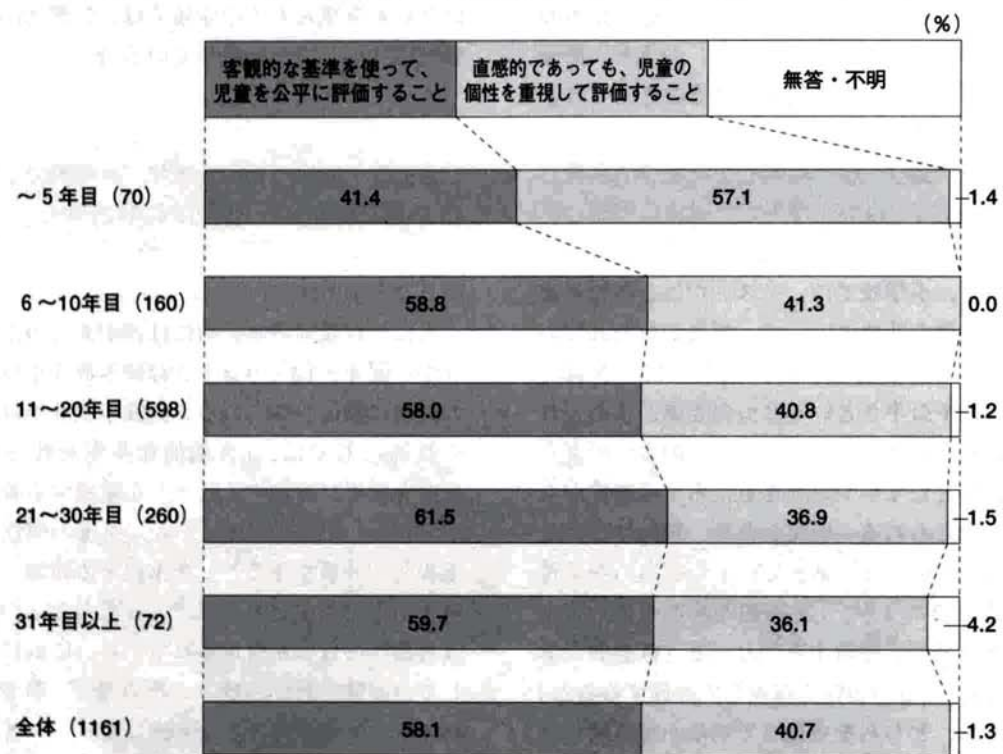
いることがわかる。次に、教職経験年数別には差があるのだろうか。図4-13をみると、経験年数5年以下の教師に特徴がみられる。経験年数6年以上の教師たちでは、「客観的な基準を使って、児童を公平に評価すること」を重視する教師が6割、「直感的であっても、児童の個性を重視して評価すること」を重視する教師が4割というおおよその比率で、どちらかといえば客観性のほうが重視されている。これに対して、経験年数5年以下の教師では、前者が41.4%、後者が57.1%に逆転しており、客観性よりも個性のほうが重視される傾向がある。この違いが、「世代効果」によるものなのか、「経験効果」によるものなのかは、今回の調査だけでは特定できないが、興味深い結果である。

図4-12 教師の評価観—客観志向か個性志向か(小・中比較)



注) ()内はサンプル数。

図4-13 教師の評価観—客観志向か個性志向か（教職経験年数別）



注) ()内はサンプル数。